

〔査読論文等〕

【研究論文】

1. 社会福祉実習導入教育におけるメンター配置の意義
—受講生に対する、教員を比較対象としたアンケート調査から—
二本柳 覚 (高知県立大学)

【特集Ⅰ：学会指定研究 「社会福祉学教育評価」】

1. 「社会福祉教育の評価は如何になされるべきか」
担当理事：宮嶋 淳 (中部学院大学)・杉山克己 (青森県立保健大学)
2. 「教育評価とは何か」
宮嶋 淳 (中部学院大学)
3. 「保育学教育における評価」
平澤一郎 (長岡こども・医療・介護専門学校)
4. 「教育評価に関する調査報告」
宮嶋 淳 (中部学院大学)
(資料：調査票)
5. 「保育士養成における、ルーブリックを活用した教育評価
—学生による実習・学外活動の自己評価票の作成—」
平澤一郎 (長岡こども・医療・介護専門学校)
6. 「社養協加盟校の3つのポリシー分析」
宮嶋淳 (中部学院大学)・平澤一郎 (長岡こども・医療・介護専門学校)
7. 「『費用対効果』からみて社会福祉教育はどのように『評価』されるのか」
宮嶋 淳 (中部学院大学)

【特集Ⅱ：2015年度日本社会福祉教育学会第11回大会報告】

第11回大会の概要及び開会式

第1部 学会企画シンポジウムⅠ

「学生の教育ニーズに対応したソーシャルワーク演習の教材・方法・教授法の総合的検討」

(シンポジスト資料)

川島 恵美 (関西学院大学)
片岡 靖子 (久留米大学)
大山 博幸 (十文字学園女子大学)

第2部 学会企画シンポジウムⅡ

「実習『前』評価システムの検討とOSCEの試行」

(シンポジスト資料)

巻 康弘 (北海道医療大学)
松岡 是伸 (名寄市立大学)
嘉村 藍 (仙台白百合女子大学)

教育評価に関する調査報告

宮嶋 淳 (中部学院大学)

I. はじめに

学会指定研究「社会福祉教育評価研究」では、2014年1月10日付けで本学会の会員の皆様に「本学会員の教育評価の現状に関する調査について」をご依頼した。ご依頼の趣旨は以下のとおりである。

この調査は、社会福祉教育課程を担っている本学会員が如何に自身の教育実践を評価しているのか、如何なるシステムと内容のもとで評価されることを受け入れているのかという現状を把握することを第一の目的とします。会員の教育実践における評価の現状を調査し、主観的評価と客観的評価システムと当事者である学生の評価とを適合させ、教育並びに教育評価に関する三者のニーズを明らかにすることを目的とします。また今後、本教育評価研究を進展させていく上でのエビデンスを蓄積することをめざします。

回答いただいた会員は筆者を含め6名であり、回答の概況を述べた上で、筆者の事例を紹介し、比較検討を行なっていくと考える。以下、調査項目をQで表し、それへの回答をAで示した。

II. アンケート回答事例

Q1. 貴方の学部・学科におけるシラバスの取り扱いについて

Q1-1. シラバス(授業計画)を公開していますか

A1-1. シラバスを公開している会員は、8割であった。ホームページ上あるいは、紙媒体で学生に配布、公開されている。

本学ではシラバス(授業計画)を学内専用ホームページで、公開しており、学生や教職員は自ら設定したユーザーIDとパスワードでログインすることができる。紙媒体での学生への配布は行なっておらず、シラバスを確認せず、時間割に即して、あるいは取りたい資格に応じて、開講されている科目を順次、履修している可能性が高い。

本学のシラバス作成様式は、以下の表1のような項目となっている。教員は、シラバスシステムに直接入力することもできるし、Excelシートをダウンロードして作業することもできる。また、所定の形式を用いれば、Excelシートをアップデートすることも可能である。あえて特徴をあげるとすれば、授業内容と予習・復習を毎回、明示していくことであろう。これにより、学生の出席率が向上していると考えられる。また、テキストと参考文献の違いは、「全員が購入するか否か」を判断基準としている。教員個人がブログを開設し、よく用いるホームページについても、記入することが可能である。

筆者は、本学公式ホームページ上の「Web研究室」にブログを設けており、そこで参照すべき資料を提示するようにしている(図1:参照)。

表1 シラバス(授業計画)作成様式

科目名					
担当教員					
学年					
開講期					
単位数					
授業形態					
到達目標					
授業概要					
授業計画	第〇回	授業内容	予習・復習		
評価方法					
受講上の注意					
テキスト (履修者全員が購入するもの)	文献名	著者	出版社	出版年	ISBN
参考文献 (希望者のみが購入するもの)	文献名	著者	出版社	出版年	ISBN
参考URL	表示名		説明		

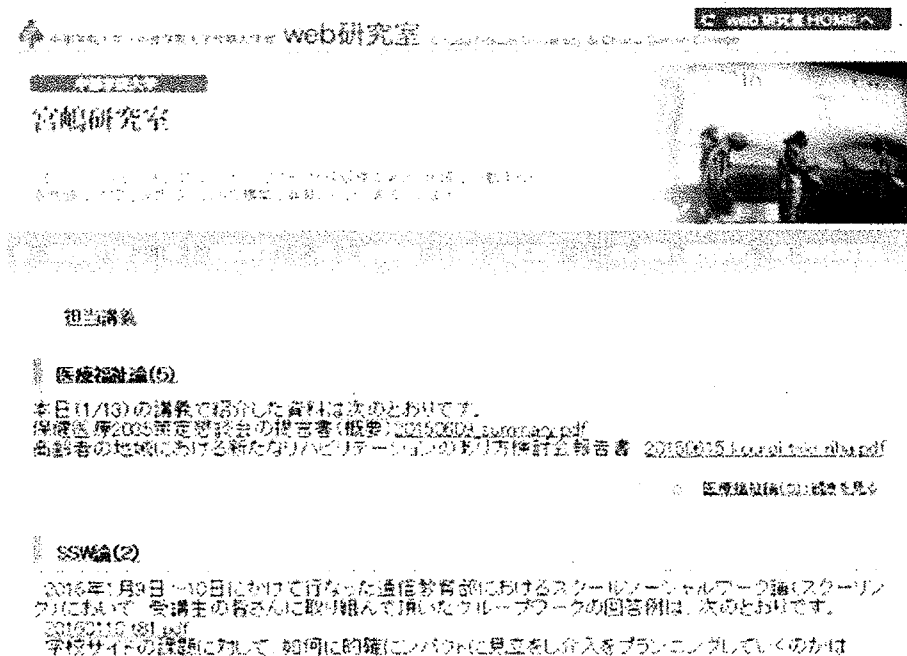


図1 「Web研究室(ブログ)」を活用した講義資料の提供

提示する資料は、国や行政政策に関するもの、自身が作成したスライドショー、アクティブラーニングで完成させたポスター等としている。これによって、紙媒体での資料配布を極力抑え、事前にスライドショーを閲覧できるようにすることで、学生の予習への便宜を図っている。

Q 1-2. シラバスに成績評価の基準を明示していますか

A1-2. 答えは100%＝アであった。また、講義・演習・実習ともに示されており、卒業研究等研究系科目については示されていない場合もあるようだ。

筆者の大学では、上記の表 1 のシラバス(授業計画)作成様式において、授業種別：講義・演習・研究系演習・実習すべてについて作成することが義務付けられている。また、成績評価の基準は、「評価方法」欄に明記しなければならないことになっている。

Q1-3. ア) と回答された方、具体的にはどの内容で評価をしていますか

A1-3. 試験&レポート&授業での発言・参加度、の組み合わせが多かった。

本学では出席状況は、学内規程上、試験を受けることができるか否かの判断材料となっているが、成績評価の指標とはしないことになっている。参加度を如何に測るのかは、議論の余地があり、発言し、積極的な学生が期末試験で必ずしも良い結果を残すとは限らないし、教員間で学生の評価が主観的に分散することがあり得る。とりわけ、演習・実習においては学生評価を客観化する必要があると感じる。

Q 1-4. シラバスをチェックする学内システムがありますか

A1-4. 1校を除いてすべての大学で「ある」を選択された。チェックする機関は、多様で「教務委員会」「監査システム」「ソーシャルワーク委員会」などとなっている。本学も表 1 のすべての項目が埋められているか否かを、教務課が事務的にチェックをし、埋められていない科目については、その連絡を教務委員が担当教員に行なうことになっている。国家試験の合格率を向上させるための方策として、教務委員等によるシラバスのチェックが学内システムとなる可能性もある。

Q 2. 学科・学部のカリキュラム・ポリシーについて

Q2-1. カリキュラム・ポリシーを理解していますか。

A2-1. すべての会員が「理解している」を選択している。現在、学部教務委員をしており、「理解している」と考えている。学部の教育方針と連動させ、かつ教育改革の方向性ともリンクするので、今後、修正が必要だと思われる。

Q2-2. カリキュラム・ポリシーは所属する学科の実情に対応していますか。

A2-2. 「対応している」と「まあ対応している」で100%であった。本学では上記のように「改善の余地あり」と考えている。本学部は 2017 年度で設立 20 周年を迎える。学部設置時代と、現在とでは福祉を取り巻く状況は大きく変化しているし、学生の状況も変化している。

Q 3. 授業に関する自己評価など。

Q3-1. 授業を他の教員に公開したことはありますか。

大学学長	控大学長	副学長	学長補佐	学部長・学科長	事務局
					大学・様式
年 月 日					
所属名 _____ 職 名 _____					
氏 名 _____					
教員相互による授業参観記録					
参 観 日	年 月 日 曜日 教室 _____				
参観授業名	_____				
担当教員名	_____				
<参観記録>					

図2 授業参観記録様式

A3-1. 7割の大学で「ある」。また、義務化されているところも認められた。本学では図2のような書式が示され、半期で2回程度、他の教員の授業を参観することとされている。筆者は、前期1回、後期2回、授業公開を行っている。ともにアクティブラーニングとして実施し、ともにポスターセッションを行なっている。また後期は卒業論文発表会として、他のゼミとの合同公開授業を行っている。しかしながら、現在のところ、フィードバックシステムがなく、参観いただいた他の教員がどのような受け止め方をされたのかは、公開した本人にはわからない。

Q3-2. 上記で「イ) ある」の方。その際の評価を受けられましたか。

A3-2. 「評価を受けている」とされた会員は2名で、「口頭・文書で評価を受けている」と「公開授業後、教員間で授業研究を実施している」という回答があった。

Q3-3. 他の教員の授業を聴講する機会は保障されていますか。

A3-3. 回答は「ある」と「ない」で二分されていた。「ある」とする会員の大学では「FD」としての実施が多かった。本学では全学で授業の公開は取り組まれており、教員メーリングリストで、他学科の公開授業の案内が送られてくる。本学は2つのキャンパスに分かれており、移動にも時間がかかり、他学科の授業への参加の機会は得にくい。

Q3-4. 上記で「イ) ある」の方。その際に授業を評価したことがありますか。

A3-4. 授業を公開している場合においても、その授業の評価については「ある」「ない」が二分されていた。評価を行なう大学においては、「評価表」が用意されている。

Q3-5. あなたは、ご自身の授業をどのように評価していますか

A3-5. 自らの授業の評価を会員は、概ね「優」か「良」と答えている。また、具体的な理由は、授業ごとで学生が「授業評価アンケート」を行っているが多かった。本学においても、「授業評価アンケート」を行っており、学生は満足しているようであるが、予習はしておらず、という結果である。予習しなくても良い授業を実施しているようで、工夫が必要だと思われる。

Q4. 評価に関する学生の参加について

Q4-1. テストやレポートをフィードバックしていますか

A4-1. 「はい」が圧倒的に多かった。筆者は「イ) ケース・バイ・ケース」。授業期間の中間で提出させるレポートは、コメントし返却している。期末試験について本学ではすべての学年・すべての科目で再試を実施することになっており、再試対象者には試験結果をフィードバックしている。

Q4-2. 学生による授業評価は実施されていますか。

A4-2. 全員が「はい」であった。

Q4-3. 学生による授業評価は公表されていますか。

A4-3. 全回答が「はい」であった。学生による授業評価のアンケート結果は、単純集計され、フィードバックされる。アンケートの裏面には、いくつかの自由記述式質問がなされているが、そのフィードバックはこれまでなかった。通信教育部において、自由記述欄のフィードバックもなされるようになり、それに対する再フィードバックを教員が行うことになった。筆者が行なったフィードバックの例は次のとおり。

教員からのコメント:

会場が狭く、受講者に不便をかけたので、アメニティに配慮していく必要性を感じた。「声量が乏しい」との指摘を受け、今後のスクーリングは「マイク」を常置して活用したい。自己紹介に時間をかけているスクーリングがあるようだが、逆にそれは如何がなものか

と問いたい。私の授業では「グループワーク」の中で行っている。授業内容や配布資料、PPやDVDの活用については、満足度が高いようなので、現在の進め方でよいと考える。

Q4-4. 学生による授業評価を翌年の授業に如何に反映させていますか。

A4-4. 会員はすべて「はい」であった。筆者は、「なかなか難しい」と思っている。社会福祉士国家試験指摘科目については、当然、前年度の国家試験問題を取り込むような講義にもなるし、ミニテストと称して過去問題を解かせる。その他の科目については、時流に即した話題と国や公的機関の施策、提言、白書を活用するように心がけている。

Q4-5. 学生による授業評価の意味を教員間で共有していますか。

A4-5. これは「ケース・バイ・ケース」が多かった。ただし、その理由は質問できておらず、不明である。

Q5. アンケートにお答えいただく際にイメージされたクラス規模は、次のうちどれですか。

A5. これも回答者ごとで分かれており、講義系科目なのか、演習系科目なのか、不明であり、分析は不可能。筆者は、150~200人程度の講義も担当することがあるが、人数の規模により、レポートやミニテストの回数、フィードバックの丁寧さが欠ける傾向はあると考えている。

Q6. 授業で、私語を減らし、集中させる貴方のテクニックを教えてください。

A6. 「その都度注意する」「講義の音量を大きくする」「発問する」「グループワークさせる」「私語をしたら退出させる」「座席指定にする」などのアイデアが提供された。筆者は「高校生のようだ」と、最初は抵抗があったが、授業の始めと終わりに「起立・礼・着席」のあいさつを行なうようにしている。また、受講している学生の中に日替わりで「本日のリーダー」を数名、指名し、静かにさせるという役割を担わしている。騒がしくなると、本日のリーダーである学生に「みんなに伝えて！」と声をかけるようにしている。また、伝言ゲームを取り入れるようにしている。つまり、一番前の席に座っている学生に「静かにするように」と、後ろの席の学生に伝えてもらい、静かになるまで「待つ」時間を設けている。

Q7. 授業を高めるためにどのような工夫をしていますか。

A7. 「大学指定の学生授業アンケート以外のアンケートをする」「参加型授業にする」「視聴覚教材を活用する」などのアイデアが記述された。筆者は、教員自身が「楽しそう」に話す。学生の個人名をあげ、いわゆる「無茶ぶり」をする。呼び上げた学生がどこに座っているかわからないときは、

どこにいるのか確認できるまで、呼び続けるし、いないことが明らかなきときは「欠席」とチェックをする。また、在席していれば、近くまで行って「どう思う？」と話しかけ、マイクで応えさせるなどを行なっている。

Q9. 「教育評価」という言葉からイメージされること、キーワードをご自由にお書きください。

A9. 「技能評価の確立が必要」「自己点検」「学生との対話」「改善への工夫」などが記述されていた。

Ⅲ. 考察

本調査からみてきたことは次のとおりである。

まずシラバス（授業計画）は、ほとんどの場合公開されており、紙媒体とネット上での公開が逆転しつつあることがわかる。その中で、成績評価についても明示され、学生は授業に望む以前に「何が評価されるのか」が了解できる状況にある。また、シラバス（授業計画）は、何らかの学内機関でチェックされていることがわかる。しかし、そのチェックがその後、どのように授業に影響を与えるのかは了解できなかった。したがって、Q1. で設問したシラバス（授業計画）については「教員任せ」というよりも「チェック機関の介入」があり、「公開に耐え得るもの」としていく方向にあるようだ。しかし、その実際は不明である。

Q2. で設問したカリキュラム・ポリシーについては、すべての回答者が了解し、各々妥当なものが整えられていると感じていることが了解できた。どの大学・学科もカリキュラム作りには苦心しており、それに相当時間をかけて検討しているだろうことは容易に想像ができる。また、それへの参加・参画をしている会員からの回答が寄せられたのだと考えられる。

Q3. では授業に関する自己評価等を尋ねた。概ね回答した会員は自らの授業を評価しており、他者評価（学生や他の教員）に堪え得る授業を展開できていると考えている。Q4. では学生の評価に関する参加を尋ねた。概ね回答した会員は学生の参加を受け入れていた。このことから、授業は自己や他の教員、そして学生から評価されるものであるという認識が定着していると考えられる。

Q5~7では、授業の進め方に関する具体的な工夫をお尋ねした。上記に認められるように様々な工夫がなされていた。最後に、「教育評価」という言葉からイメージされることとして「技能評価の確立が必要」や「自己点検」「学生との対話」「改善への工夫」などが記述されていた。これらを見ると、学生の状況やニーズに即した効果的な社会福祉に関わる技能を評価する仕組みや、双方向型の授業の実施、学生への積極的な働きかけを行なう場を構築する

など、臨機応変で即応的な授業展開を工夫する必要性が指摘されていると考えられる。

本調査を通してわれわれ教員は、教育評価が自己評価、教員間評価、所属からの評価、学生からの評価などが多面的に実施されることを認識し、日々、それらに対応できる工夫を惜しまず、教育の在り方を向上させていかなければならないと考えられた。

【資料】

2014年1月10日

日本社会福祉教育学会
会員の皆様

学会指定研究「教育評価研究会」
代表 杉山克己・宮嶋 淳

本学会会員の教育評価の現状に関する調査について(ご依頼)

前略 いつもたいへんお世話になります。

ご存知のとおり本学会指定研究「教育評価研究会」は、研究期間：2013年度～2015年度の3か年間で、研究を進めています。研究の進捗状況は本会NL第20号で報告しているところです。

この度、本研究会の主題を会員の皆様のニーズに即して確定させていくため、本調査を実施させていただくこととなりました。

是非とも別紙をご記入の上、FAX又は郵送にて担当理事までご返信くださいますよう、お願いいたします。また、本会ホームページ並びに担当理事のWEBサイトにも書式を掲載しておりますので、ダウンロードされ、E-mailに添付いただき、送信して頂くことも可能です。

本学会のみならず、学術としての社会福祉の生き残りをかけて、皆様のご協力を賜りたくお願い申し上げます。どうぞ、よろしく申し上げます。

記

- 1、回答目安日 : 2014年1月末日
2、回答提出先 : 担当理事 宮嶋 (中部学院大学)

〒501-3993 岐阜県関市桐ヶ丘2丁目1番地

E-mail : miyaji@chubu-gu.ac.jp

FAX&TEL : 0575-24-9384

http : http://web2.chubu-gu.ac.jp/blog/web_lab/miyajima/index.html

以上

【調査の目的】

この調査は、日本社会福祉教育学会の会員の皆様を対象として実施するものです。本学会の指定研究としての性格から、お寄せ頂いた回答並びに集計データは本会並びに社会福祉教育学の発展のため以外の目的に使用することはありません。

この調査は、社会福祉教育課程を担っている本会会員が如何に自身の教育実践を評価しているのか、如何なるシステムと内容のもとで評価されることを受け入れているのかという現状を把握することを第一の目的とします。会員の教育実践における評価の現状を調査し、主観的評価と客観的評価システムと当事者である学生の評価とを適合させ、教育並びに教育評価に関する三者のニーズを明らかにすることを目的とします。また今後、本教育評価研究を進展させていく上でのエビデンスを蓄積することをめざします。

学会指定研究「教育評価研究会」

代表 杉山克巳・宮嶋 淳

【調査項目】

Q 1. 貴方の学部・学科におけるシラバスの取り扱いについて教えてください。

1-1. シラバス（授業計画）を公開していますか

ア) 公開している(以下から選んで下さい。複数回答可)

1. 一般ホームページ 2. 学内専用ホームページ 3. 紙媒体で学生に配布、公開
4. その他()

イ) 公開していない

1-2. シラバスに成績評価の基準を明示していますか(該当するものすべて選択)

ア) 明示している(種別: 講義・演習・研究系演習・実習)

イ) 明示していない

1-3. ア) と回答された方、具体的にはどの内容で評価をしていますか

1. 試験 2. レポート 3. 出席状況 4. 授業での発言・参加度
5. その他()

1-4. シラバスをチェックする学内システムがありますか

ア) ない イ) ある ⇒ 具体的な機関:

⇒ 具体的な方法:

Q 2. 学科・学部のカリキュラム・ポリシーについて

2-1. カリキュラム・ポリシーを理解していますか。

ア) 理解している イ) 理解していない

2-2. カリキュラム・ポリシーは所属する学科の実情に対応していますか。

ア) 十分対応している イ) まあ対応している ウ) 何ともいえない

エ) 改善の余地あり オ) 全く対応していない

Q 3. 授業に関する自己評価など。

3-1. 授業を他の教員に公開したことはありますか。

ア) ない イ) ある ⇒ 具体的な方法:

⇒ 公開した理由:

3-2. 上記で「イ) ある」の方。その際の評価を受けられましたか。

ア) 受けてない イ) 受けた (口頭のみ 書面のみ 口頭と書面で その他()

3-3. 他の教員の授業を聴講する機会は保障されていますか。

ア) ない イ) ある ⇒ 具体的な方法:

⇒ 公開された理由:

3-4. 上記で「イ) ある」の方。その際に授業を評価したことがありますか。

ア) ない イ) ある (口頭のみ 書面のみ 口頭と書面で その他())

3-5. あなたは、ご自身の授業をどのように評価していますか

ア) 優 イ) 良 ウ) 可 エ) 落第 ⇒その理由:

Q 4. 評価に関する学生の参加について

4-1. テストやレポートをフィードバックしていますか

ア) はい イ) ケース・バイ・ケース ウ) いいえ

4-2. 学生による授業評価は実施されていますか。

ア) はい イ) ケース・バイ・ケース ウ) いいえ

4-3. 学生による授業評価は公表されていますか。

ア) はい イ) ケース・バイ・ケース ウ) いいえ

4-4. 学生による授業評価を翌年の授業に如何に反映させていますか。

ア) はい イ) ケース・バイ・ケース ウ) いいえ

4-5. 学生による授業評価の意味を教員間で共有していますか。

ア) はい イ) ケース・バイ・ケース ウ) いいえ

4-6. 差支えなければ、貴学の「学生による授業評価様式」をご提供ください。

ア) 了解 イ) 困難 ウ) 提供のための条件あり

Q 5. アンケートにお答えいただく際にイメージされたクラス規模は、次のうちどれですか。

ア) 20人未満 イ) 20人~40人未満 ウ) 40人~60人未満 エ) 60人~100人未満 オ) 100人以上

Q 6. 授業で、私語を減らし、集中させる貴方のテクニックを教えてください。

Q 7. 授業を高めるためにどのような工夫をしていますか。

Q 8. 今後の研究会について

ア) インタビューに答えても良い イ) 研究会に参加したい

ウ) 研究会の活動に興味を持った エ) 特に関心がない

Q 9. 「教育評価」という言葉からイメージされること、キーワードをご自由にお書きください。

=ご協力ありがとうございました=